



時空間の旅人
(結城美和編)



輝

プロローグ

美和はこの力を持て余していた。

タイムトラベル！

目を強くつぶり、息を止め続ける感じにする。顔は鬱血するが、数秒の我慢。

フワッと浮遊間を感じればいいのだ、もちろん、意識の中で数字（西暦の年月日）を思い浮かべるのは言うまでもない。

時間は出発時間が反映される。

ただ、どうしても目撃されるのは避けたい、そのため出発時間は深夜と決めていた。

それと、タイムトラベルは過去に遡るだけとなる。なぜか判（わか）らぬが未来には行けないのだ。

戻るときは、簡単で『リターン』と念じれば出発した時間に戻ることができる。

美和は、この力に気づいた当時…盛んにタイムスリップしてみた。

繰り返すうちに、戻ったとき、変な噂で持ちきりになっているのだ。

幽霊が出るということで、出発場所が心霊スポットになっている。

美和『この私が、おばけ？』

確かに、髪は長く下を向くと殆ど顔が隠れる。

肌は抜けるように白い…目鼻立ちは…典型的な日本の美人…

美和は、暫くタイムトラベルから遠ざかっていた。

飽きたわけではない…興味を失ったというのが正解かもしれない。

何時の世も、同じである。

伝えられている、歴史と遜色ない。

ある図書館で、歴史本を借りて読んだ。

戦国時代…1493年頃から1573年代まで続いたとされている。

美和『え～～すご～～い、80年も戦いがあったんだ～～』と感銘を受けていた。

1570という数字が意識に残っていたが…とに角眠たくて…

美和は夢を見た。合戦の夢を…

遠くから、女性の叫ぶ声が近づいてくる…

「美和姫～～どちらにおられますか～～！！」

焦げ臭い臭いととも、煙も漂ってくる…

美和は、苦しくて目覚める。

美和『えっここどこ？』

自分の寝室ではない。

突然、着物姿の女性が飛び込んできた。

「美和姫様～こちらでしたか～早く逃げなくては～～」

美和『えっえっ？何？』

「さっ、早く！」と手を引かれ…走らされた。

その時、部屋の隅に死体が転がっていた。美和も迎えに来た女性も気付かない…

それこそ、結城家の美和姫であった。

美和は、状況が飲み込めないでいた。

眠っている間に、タイムスリップしたに違いない…1570という数字が蘇ってくる。

まさに、戦国時代に飛んでしまったようだ。

しかし、困ったことに、予備知識もない。

ふだんなら、ちゃんと調べてから、飛ぶのだけど…

いつもタイムスリップする空き家の洋館の部屋からではなく、自分の寝室からと言うのも困る。

そこに戻りたくても…火災を起こしているようなので近づけない。

闇雲に走ってきたものだから…道さえ覚えていない。

タイムトラベルは、位置まで移動してくれないからだ。

もし、危険が迫り戻る時は賭しかない。道路の真ん中でも…時間によっては避けることができる。

しかし美和の心にワクワクしているものを発見する。

まず、この私がお姫様と間違えられている…似ているのだろうか？…

それと、美和姫と言っていた。

私の名も美和、偶然だろうか？

何もデータがない状況…以前のタイムトラベルとは違う…

歴史の記録にもない状況…美和姫という名前さえ読んだ記憶がない。

同じ名前なら記憶しているはず。

そんなことを思いながら…着いた所は小さな屋敷である。

女「姫様…窮屈でしょうが、ご辛抱を…」

美和「あの～～…ここ何処ですか？」と女に聞いてみた。

女は怪訝な顔をして「結城家の別宅です。」

美和「結城?!」とビックリした。名字も同じ…美和は、何かザワザワした得体の知れない気持ちになる。

何なのだろう…ここから去ってはいけないというような…

しかし、戦の喧噪は近づいてくる。

一緒にいた、女性は「様子を見てきます」といって部屋から出て行った。

美和は一人になり、チャンスと思い現代へ戻るため「リターン」と念じた。

こんな危険なところはごめんである。

中々、浮遊感が感じない…「う～～ん・う～～ん」苦しくなって目を開けてみる…どうしたことか、変わらない…

もう1度「リターン」…

美和『なんで?…飛べない…』今までに飛べなかったことはないのである。

美和は焦った…しかし心の底には期待感みたいなものもあり…戸惑う…

様子を見に行った女性が慌てふためいて、戻ってきた。

女「姫様！ここも危なくなりました！兎に角逃げましょう…」

数人の兵士の援護を受けながら…脱出する。

美和はパジャマ姿…走るのに支障はない…

しかし側近の女は、不思議に思わないのだろうか…

まあ、無地でグレーのパジャマだし…状況的に切迫しているからかもしれないが…

しかし、不自然と思う人間はいるものである。

一人の若い女が、追い付いてきて…「姫様…これを！」と羽織を手渡された…

美和は『ん？かえって邪魔なんだけど…』と思ったが…羽織ることにした。

美和はなんだか…どうなるか判らないため…ハラハラドキドキ…。

今までタイムトラベルをした時には、感じなかった気持ちだ。

傍観的ではない、現実味をひしひし感じる。

何回か『リターン』と試してみたが…

超能力は戻っていない…このままこの時代で過ごさなければならないのか！という絶望感もあるが…心の隅に楽観視している自分もいる。

しかし、楽観視できない状況になってきた。

走っているのは、数人の女達だけになっていた。

援護してくれる兵士も、皆倒れていく。

最後尾にいた、女が「ぎゃっ！！」と叫んで倒れる。

背中には、深々と矢が刺さっていた。

美和『じょ…冗談じゃないわよ～～』と走るスピードが速くなる…

敵が迫っているのだ。

シュッと音がした瞬間、左腕に激痛が走った。

「姫様～～～！！」

美和は見た、自分の腕に矢が刺さっていることを！

激痛で、気が遠くなる…

美和『痛～～ツ…私ここで…死ぬのかしら…』

周りの喧噪が萎んでいくように聞こえなくなっていった……

同じ頃、古室宗綱軍は結城家の窮地を知り、応援に駆けつけているところだった。

数名の女達が、今しも皆殺しにされようという場面に出くわした。

宗綱「者ども～～応戦せよ！！」と走り出す。

宗綱は敵を切り捨てながら、女達のそばに到着。

宗綱「お夕殿～～無事であったか～～美和姫は？」

お夕「宗綱殿…かたじけない…美和姫は深手を負ってしまいました…」

宗綱「なに！」お夕に庇われている美和姫を確認する。

宗綱「頼年！！後を頼む！！」と命じ、美和姫を背負い古室家の陣地に向け走り始めた。

美和は、気付いた。

途端に鈍痛が戻ってくる…ジーンジーンと押し寄せてくる痛み…

『痛いよ～～、誰かこの矢…抜いて～～（泣）』と声にならない叫びをあげる。

あわせて、誰かに背負われていることも感じた。

たくましい背中…何か安堵するとともに意識が再び遠のいた。

宗綱「清庵殿～～！怪我人じゃ～～頼む～～！！」

清庵「おお！美和姫様ではないか～～」と、傷を見て…

清庵「宗綱様、大丈夫です、腕ですから致命傷にはなりません。」

宗綱「そうか～～良かった。」

清庵「早速、矢を抜きましょう…」

美和は、再び激痛で気付いた。

美和「きゃ～～～痛い～～～」

お夕「美和姫様～気付きましたか？…今矢を抜いているところでございます、暫くご辛抱を！」

美和「痛い痛い（泣）」

美和は、歯を食いしばって堪えるが…

清庵「よし、抜けたぞ！後はサラシで出血を止めよう。」

宗綱「清庵殿、かたじけない。」

清庵「なんの…宗綱殿の奥方になられる方だから…」

宗綱「…お夕殿、美和姫に世話を頼む。前線に戻らねば…」

お夕「かしこまりました。」

美和は目覚めた。

左腕に鈍痛はあるものの、随分楽になっている。

そして、薄い布団に寝ていた。

着衣も、いつの間にか着物に変わっている。

それよりもビックリしたのが、下着を着けていない…

お夕「姫様…お目覚めですか？傷の具合はいかがでしょう…」

美和「あっ…あの～し・下着は？…」

お夕「下着？…ああ…あの変な布きれのこと？」

美和はコクンと頷くだけ…

お夕「姫様は…こそこそ色々なものを縫っていましたから、驚きませんが…これからは、そのようなことは自粛なさいませ。」

美和は、なんか不思議に思った。

なんの疑いもなく、この女性は世話を焼いてくれている…

いくら似ていると言っても、双子でも何処かしら違うものである。

まして、私の髪はこの時代の髪型と違うはず…

美和は、髪を触って「ハッ」とした。

肩までの長さは変わらぬものの…前髪を頭頂部で結わえられている。

この髪型…この時代でも不思議ではないのかも知れない…

暫くして、ご飯が運ばれてくる。

見ると…白湯であった…美和『病人じゃないんだけど…』と思ったが、お腹が空いているので食べる。

美和『ん！…何これ～不味い～～』

チラチラと入っている緑色のものは、大根の葉っぱのよう…塩気も薄い…

1個だけ別皿に付いてきた梅干しで何とか食べられる。

スプーンなんて、この時代にあるわけがないし、箸だけで非常に食べづらい…

仕方がなく、お椀の縁に口を付け流し込む。

口やかましそうな女性は何とも言わない…当然なのだろうか…

美和が小さい頃、母に行儀が悪いと叱られたものである。

この女性…なんという名前だろう…美和は聞くのも不自然と黙っていたが…

部屋の外から「お夕殿、清庵様がお越しです。」と声が掛かったので判った。

美和『お夕というのか～清庵？…ああ矢を抜いてくれたお医者様か～しかし…私を背負ってくれた方は留守みたい…』

清庵と言われた医者は、白髭を蓄えた老人であった。

清庵は傷を見て「おお～血も止まっているし、腫れも少ない…もう心配いらんだろう。」

お夕「かたじけない。」

清庵「情報によると、結城和重殿は城と一緒に亡くなったそうだ…」

美和『和重？』

お夕は「殿が？…」と言って、涙をこぼし始めた…

美和『そうか…殿と言うことは、私の父親なんだ…』

美和は、状況的に涙を見せなければならないと思い、着物の裾で目頭を押さえた。

清庵「美和姫様…気を落とさずに…」

戦況は劣勢みたいで…美和はこれからどうなるのだろうと…不安になった。

お夕は、暇を見つけては、美和の髪を梳かす。

お夕「美和姫様…宗綱殿が間もなくお戻りになられます。」

美和「宗綱？」

お夕「いいですか？姫様は宗綱様の奥方になられるのです…知らなくとも…知っている素振りをするのですよ！」

美和「え？」美和はドキリとした。何故という疑問符が現れる…

お夕は意味深な目で見つめ返してくる。

お夕「いいですね！姫様…ふふっ」

美和は、戸惑う…お夕は、すべてのことが判っているという素振りだ。

美和「お夕様…」

お夕「駄目です…お夕と呼び捨てになさりませ！」

美和「では…お夕…私はどうしたらいいのですか？」

お夕「宗綱様のお子を産むのです。」

美和「えっ？…何故？」

お夕「そう言う定めだからです。」

美和「嫌です。私は姫などではありません。」

お夕「判っていますよ…ふふっ」

美和はぞっとした。

美和「私は…この者ではないのですよ！」

お夕「遙かに時の経ったところから…と言いたいのでしょうか？」

美和「知っていたのですか？」

お夕「勿論。輪廻転生…ご存じですか？」

美和「輪廻…？」

お夕「生まれ変わると言うことですよ。」

美和「??？」

その時、ドタドタという足音が聞こえてきた。

お夕「美和姫様、いいですね！定めなのですから…寵愛を受けられること！」

襖ががらりと開いた。

宗綱「おお！美和姫！元気になられたの～～」

お夕「宗綱殿！無事のご帰還…麗し～」

宗綱「うむ！」

美和は宗綱の顔を初めて見た。

精悍な引き締まった美しい男であった。

宗綱「よし、今宵は宴を催そう！」と言い放ち、去っていく。

美和はドギマギしてしまった。

美和は、お風呂に入れられた。

お夕が背中を流す…「ふふ…同じところに同じ形の痣がある…」と呟く…

美和「えっ？」

お夕「宗綱殿も…全く同じところに同じ形の痣があるんです。そして…亡くなった美和姫にも…」

美和「亡くなった美和姫??? どういうことですか？」

お夕「夫婦となる殿方とおなごには、印が付いているのですよ。いえ…一族と言い換えましょう…」

美和「私に、痣などないはず…」自宅の浴室に姿見があり自分の身体の隅々は把握していた。

お夕「それはそうです…特殊な者しか見えません…」

美和「お夕は、特殊な人間なのですか？」

お夕「ふふ…」と笑ったまま答えようとしなかった。

美和「それと…亡くなった美和姫というのは？」

お夕「…何と説明して良いのやら…あるお方の怨念により美和姫様は一度お亡くなりになっているのです。それは、時の流れに逆らうものでした。宗綱様のお子を産むはずだったのに…別なお方がご心配なさり美和姫様を輪廻転生させたのが貴女です。」

美和「と言うことは???…」

お夕「貴女は本当の美和姫様なのですよ…理由があって遙か時の経った時間にお生まれになった…」

美和「私にはタイムトラベルの力があり…自分からこの時代に飛んだと思っていましたが…」

お夕「タイム??? 難しい言葉はわかりませぬが…あるお方がお戻しになったのですよ」 美和は、それを聞きショックを受けた。

華やかな宴… 美和姫は、宗綱の傍らに座り酌をしていた。

しかし、素晴らしい舞踏も美和には何の感情もない。

お風呂場で、お夕の言ったことが頭から離れられないでいた。

宗綱「美和姫～いい踊りじゃろう～」

美和「あっ…ハイ…」と、別なことを考えてたから慌てた。

宗綱は、美和をジッと見つめる。

その真っ白な透き通るような綺麗な目に、美和は直視できなかった。

宗綱「何か…心配事か？」

美和は、ユックリと首を左右に振った…こういう仕草は、初めてかもしれない…

宗綱「そうか…傷が痛むのか？」

美和はまた、優しく首を振る…『なんて優しい、声なのだろう…』と見つめ返してしまった。

突然、宗綱が美和の手を取り、優しく包む…

宗綱「許してくれ…私が遅れたばかりに…結城和重殿を…」

美和「いえ、あなた様のせいでは…ござりませぬ…」

宗綱「…すまぬ…」

見つめ合ったままの二人…

お夕「殿? そろそろお開きなさっては?…」

宗綱「おっ、そうじゃの～」

宗綱は立ち上がり「皆の者～、宴たけなわじゃが、わしは失礼する。そのまま英気を養うように。」

出席していた、兵達から「お～～っ」と言う歓声上がる。

美和も立ち上がった。

お夕は、頷いてその場に残る。

宗綱は、優しく美和の手を取りエスコートする。

美和の心は、決まっていた。

胸が熱い…宗綱様が恋しいと…理屈ではない…ピタッと感じたのである。

美和は、幸せな日々を過ごしていた。
宗綱様は優しくて…お側にいると心穏やかになる。
池の鯉に餌をあげる時も、小鳥に餌をあげる時も…とても優しい目をしている。

宗綱「のう…美和姫…戦のない世界…これから訪れるのだろうか…」
美和「はい！必ずや…平和な時が来ます…」
宗綱「そうじゃの～～わしは戦が嫌いじゃ！何故周りの武将達は争うのじゃろうと…話し合いを求めるのじゃが…」
美和は、少し歴史を学んでいるので答えに窮する。
しかし、古室・結城という城主が歴史の記録に出てこないのである。
それほどちっぽけな城主なのだろうか…と不安にもなる。

「失礼つかましまする～～」と兵が走って来た。
宗綱「何事じゃ！！！」
「はっ、織田の軍勢が…領地に近づいております。」
宗綱「なに！…あい判った！」
美和「殿…」織田と聞いて心が揺さぶられた。
宗綱「姫！行かねばならぬ…支度を…」
美和「…離れとうござりませぬ～～」
宗綱「大丈夫！」
美和は、自分の身体の異変に気付いていた、月のものがない…
美和「殿…ご無事なご帰還を…それと私のお腹に…」
宗綱「なんと！…姫！でかした！」と満面の笑顔…
しかし直ぐに、表情が変わった。怖いぐらいな精悍な表情に…
美和は止められるなら止めたい…しかし、状況的にそのような雰囲気ではない。
美和は心の中で『殿～～っ、離れたくありません～～』と叫んでいた。
織田は天下を取った武将である。

また合戦が始まる。
慌ただしい喧噪の中…お夕の姿が見えない。
美和が信頼できるのは、お夕しか居ない。
お夕を求め、屋敷を歩いていると…
ある部屋から…お夕「……………そんな…どうしたら…はい、判りました。」という不明瞭な、小さな声が漏れ聞こえてくる。
美和は、耳を欻（そばだ）ててみる。

突然、「姫様…お入り下さい。」と声が掛かる。
美和『えっ、何故判ったのかしら…』
美和が襖を開けてみると、お夕は白い着物に紫の袴を着ていて、平らな板状のものをもって来た。その前には飾りの付いた円形状の物がある。
美和も、神社などで見たことのある…神鏡と言われるものだった。
お夕「姫様…明日、旅立ちます。北へ向かえとの、お告げです。」
美和「えっ！」折角、幸せなのに…
お夕は、美和の心を読んだように…「ここも、危なくなりました。お腹の子を守る為です。」

美和「どうして、お腹の子のことを知っているのですか？」

お夕「勿論、存じていますよ、これから起きることも…」

美和は、宗綱の支度を手伝っていると…兵が走ってきた。

兵「殿～～っ、織田軍には鉄砲隊が～～」

宗綱「何！卑怯な～～～あい判った、直ぐに行く！」

美和「殿！行ってはなりません～～」

宗綱「美和姫、そうはまいらん…一国の主が逃げるわけにはいかん！…」

美和「…」

宗綱「いざという時は、お夕と越後に逃げるのだ…今度の戦…尾張の織田信長が相手…苦戦するだろう…」

美和は、胸が張り裂けそう…大粒の涙がボロボロと流れ落ちる。

宗綱は、美和姫を強く抱擁した。

宗綱「姫！元気なお子を産んでくれ！」と言い残し、走り出していく。

美和「宗綱様～～～～っ（泣）」

号泣する美和…傍らにお夕が現れた。

お夕「姫…お支度を！…」

美和「嫌です！宗綱様のお帰りを待ちます…」

お夕「何を血迷っているのですか！宗綱様も仰っていたではないですか！元気なお子を産んでくれと…」

美和「嫌！私は自分の気持ちに正直でいたいのです。初めて愛した方なのですよ！」

お夕「気持ちはわかりますが…越後へ逃げ延びるのが最善の方法かと…」

美和「嫌！嫌よ～～！宗綱様～～～っ」

パン～～～ンといい音がした。

お夕の平手が美和姫の頬を打った音である。

お夕「姫様！…さ・だ・め…なのです。これが時の流れなのです…」とお夕が涙を流している。

美和「…（号泣）」

美和「何故…何故なのです？…」

お夕「この国を作り上げた…イザナギの神様のご意志です。」

美和「それなら…この窮地を救って下さい！！」

お夕「それはできません…歴史の流れまでは変えられません…」

美和「だって…私をこの時代に戻したではないですか！」

お夕「それは…歴史の流れの狂いを修正するためです…イザナミ神の怨念が作用したところだけなんですよ。」

美和「私が、子供産むはずだった…というわけですか？」

お夕「そう、私が目を離した隙にです…丁度…越後の屋敷にいた時でした…出産も近い時…突然姫様が消えてしまわれた…」

お夕「あれは…不思議な体験でした…後光の射したお方が現れ告げられたのです。『お夕よ！もう一度、ここに誘導してくれ！結城城に美和姫を戻すから』と…何故そうなったかと問うたら、黄泉の国を封印されたイザナギ神の妻イザナミの怨念じゃ…と仰ってました…」

美和「イザナギ・イザナミというのは…神話の話では…」

お夕「神話？…兎に角、世の流れが狂うと…この日本が無くなってしまうと…」

お夕「さあ～お支度を！詳しいことは越後に着いてから…」

エピローグ

美和達は、北に向かった…。

信濃の国から越後の国に入る頃…古室家の使者が追い付いてきた。

使者「申し上げます！…宗綱殿が…織田軍の鉄砲隊により…お亡くなりになり…なられました〜〜」

それを聞いた美和は「えっ！…嫌〜〜〜〜っ」と叫ぶと共にその場に倒れ込む。

越後は上杉謙信の領地、武田側だった結城家と古室家だが…

快く迎えてくれ…屋敷まで提供してくれたのだ。

美和は、暫くショックのあまりボーッとしていた。

お夕は、時折美和のところへ顔を出す程度で忙しく走り回っている。

それが、あるときを境に美和の側を離れなくなった。

神鏡を持ち込み、榊を供え蠟燭を灯し白い着物に紫の袴姿で、一心に祈りをあげている。

どの位経った頃だろう…建物全体が振動し始めた。

お夕は、必死に祈りを唱える。

その振動が繰り返される…

美和は、お夕の側を離れたら死ぬという直感が働いた。

それはそれは凄い恐怖だ。

朝方…やっと静かになった。

お夕「姫様…もう心配ござりませぬ。イザナミの怨念が消えました。」

美和「怖かった〜〜お夕…貴女は祈祷師ですか？」

お夕「いえ、私も若い時の記憶が薄いのです。出雲の国で巫女をしていた筈なのですが…気付いた時には美和姫様のお側におりました。」

美和「そうですか…宗綱様のことは悲しいですが…そろそろ、真相を聞かせて下さい。」

お夕「はい、判りました。」

===美和姫はイザナミの怨念で連れ去られ時間を遡り殺されました…結城城のあの部屋の隅に亡骸が転がっていたのです。イザナギ様は直ぐに気づき私を越後から結城城のあの時へと運んでくれたのです、一瞬のことでした。そして、イザナギ様が軌道修正のため輪廻転生させた美和姫様を何処からか戻されたのです。もう一度、やり直しの機会を設けてくれました。イザナギ様は、こうも仰っていました。『結城家代々に隙間はない。だから一番新しい時代に誕生させた。』と…美和姫を戻したのは、あるべき子孫繁栄のため…必要だからとも…でも、姫に矢が刺さった時は、生きた心地がしませんでした。イザナギ様はすべてお見通しでした。そうなる定めだとも…歴史は繰り返す…やはりイザナミの怨念はやってきました。それを防ぐには、姫様の側で祈りを捧げ…イザナギ様と繋がっていることです。この危機を脱すれば、後は自然に歴史が流れます。私の知っていることは以上です。===

美和「私は、これからずっとこの時代で生きていかなければならないのでしょうか…」

お夕「…何とお答えすれば…」

美和「えっ、まだあるのですか？」

お夕「はい…姫様のお子は私が育てることになっております…」

美和「そんな〜〜っ、では…私は死ぬのですか？」

お夕「…」

美和「教えて下さい！！」

お夕「判りませぬ…イザナギ神様のご意志までは…」

美和「…」

数ヶ月後、美和に可愛い女の子が誕生した。

美和はその子に滯（みお）と名付けた。

そして滯を渡すまいと、ズーツと抱いている。

添い寝をしながら、ウトウトとした瞬間…浮遊感が…

===

「おいっ大丈夫か！！」と言う呼びかけで美和は気付いた。

美和「はっ、滯〜〜っ」と周りを探す。

美和は雑木林の中に倒れていたのである。

「おいっ、しっかりしろ！どこから来たんだ？」

美和「滯…滯…（泣）」

「みお？他に誰かいたのか？」

美和は、問いかけている人物をやっと理解した。警察官だ…

美和「…今日は、何年何月何日なのですか？そしてここは何処ですか？」

警察官「平成21年12月6日、新潟県妙高市だ。」

美和「…戻されてしまったのですね…ひどい」と、すべてを理解した。

警察官「??？」

美和「私は、長野県安曇野市から来ました。」と自宅の所在を伝えた。

警察官「そうか…今無線で車を手配する、交番で話を聞こう…丁度通りかかって良かった～こんな寒空に着物とは…」

美和は、警察官が後ろを向いた時、過去へ戻ろうとタイムトラベルを試みた。

何回やっても、飛ばない…もうタイムトラベルの力はなくなっているのだ…

『滯〜〜…（泣）』

<完>